

---

# 私の騎士（かれ）は女の子！？

猿道 忠之進

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の騎士は女の子！？

### 【Nコード】

N8573Z

### 【作者名】

猿道 忠之進

### 【あらすじ】

戦乱の大陸ハームレイ、その中で最も大きく安定しているのが、騎士の国ベルムンティア王国である。

そのベルムンティア王国の近衛騎士、エステイオ・アストールは若手ナンバーワンと呼ばれる実力者だ。

そんな彼が元宮廷魔術師で、指名手配犯の黒魔術師ゴルバルナを追い詰めるのだが……。あと一步のところまで逆に振り返り討ちにあう。

意識の途切れた彼が目覚めると、彼は絶世の美少女になっていた。彼女の体を取り戻す旅が今、始まるうとしていた。

コメディ女体化ファンタジーです。読んでいただけると、とても光栄です。評価や批評を頂けると、なおのこと光栄です。

## プロローグ（前書き）

序盤はタグにある男の子、オネシヨタ要素は一切ありません。

## プロローグ

町に一步出れば、路地には露店が並んで、活気があふれている。

商店の前で値段交渉をする主婦や、その周囲を駆け回る子ども、老若男女すべてがこの客層である。そんな人ごみの中を、一際体格の大きな青年が歩いていった。

背丈は人より頭が一分抜きん出て、体格は一言で表せば筋肉質だ。均整のとれた体つきから、その青年が何かしら武道をしているのはすぐわかる。

その彼の顔はとても不機嫌そうなものだった。

「何が、褒美の休暇だ。ただの厄介払いじゃねえか」

などと毒づく青年は、プラチナブロンドの短髪の頭をかきながら毒づいていた。

「アストール。気分転換は必要だよ。最近は何暇もろくになかったし、いいんじゃないの？」

そうやって彼の横を歩く女性が、話しかけていた。別段女性として背が低いわけでもないが、その青年、エステイオ・アストールの横に並ぶとまるで大人と子どものように見える。

「気分転換か……。こんなにスッキリしないのに、気分転換も何もあるかよ」

アストールはそう言うと、王城で起きた事件の事を思い出していた。

「ああ！ ちきしょう！ 思い出しただけで、ゴルバの野郎を逃がしたのが腹が立ってくるぜ！」

アストールはそう言うと、むっとした顔で叫んでいた。

だからと言って、彼を見る人はいないに等しい。叫び声も周囲の活気の中に、飲み込まれていた。

「仕方なからう。アストールよ。奴は宮廷魔術師でありながら、黒魔術にまで手を出していた。そして、何より、奴はこの国で一番の魔術師だ。あんな悪魔どもを召喚されては、我々とどうしようもない」

そう言ってアストールを諭すのは、ジュナル・レストニアという魔術師である。彼の従者であり、教育係も務めている。

33歳と歳の割には落ち着き払っていて、どことなく爺くさいおやじである。

「ジュナルの言うとおり。王城が損壊するくらいに暴れられたら、どうしようもないって」

「メアリー。あいつは今でも黒魔術の生贄を探してるんだぞ？ しかも、生きた人間をだ！ そんな奴を放って、こっやって遊んでられるかよ」

そう言って先ほどの女性、ことメアリーに対して言う。だが、彼女の答えは至って冷静なものだった。

「見つけようにも、見つけられない。ましてや、相手は鼻のいい犬と一緒に。こっちが近づけば、臭いに気付いて逃げちゃうよ？ だったら、尻尾だすの待つのが、狩りのセオリーでしょ？」

メアリーはそう言って如何にも、元獵師らしいことを言う。

「だがよお。ん？」

反論しようとしたアストールは、そこで言葉を止めていた。

何かを見つけ、目を細めて一点を見つめる。

すぐに異変に気付いた二人は、アストールの顔を見ながら問いかける。

「どうしたエステイオよ？」

「いや、さっきゴルバを見たような気がして、あの外套を被った野郎」

そう言ってアストールは、人ごみの中を指さしていた。その先には確かに外套を頭からかぶった怪しい人物が、歩いている。

「まさか。こんな近くにいるわけないじゃん」

メアリーはそう言うなり、アストールの背中に抱きつくように飛び乗っていた。目を細めて彼の言う外套男を見ると、男は一瞬だけちらりと顔をこちらに向ける。

そこで二人は言葉を合わせていた。

「本当にゴルバルナだ」

「ジュナル！　すぐに駐屯騎士隊を呼んで来い！　メアリー！　お前は早馬に乗って王城に知らせるんだ！」

アストールの的確な指示に、二人は顔を合わせていた。

「何やってる！？　奴が逃げるぞ！」

「だが、エステイオよ。一人で行っては危険すぎるのではないか？」

ジュナルの問いに、彼は不敵な笑みを浮かべて答えていた。

「借りはきっちり返す。俺はあいつを追う！」

そういふなり、彼は腰に下げていた剣をぽんぽんと叩いていた。

「やはり、一人で行くのはよさぬか。ここはやはり三人で行った方が」

「近衛騎士のご主人様からの命令だぞ？」

そう言われると、さすがのジュナルも引き下がるしかない。

因縁のある相手ゆえに、アストールが一人で行きたがるのはよくわかる。だが、相手は元宮廷魔術師であり、現在は大魔術師と言っても過言ではない相手だ。



一人で行くには危険が過ぎる。

「なぐに、心配すんな。無理はするが、無茶はしない」

アストールのその言葉に、二人は不安を隠せなかった。だが、呼び止めるよりも先に、彼は走り出していた。

大きな背中を見送った二人は、主人の身を按じながら言われたことを実行するのだった。

「この野郎！ 待ちやがれ！ 腐れど変態魔術師がああ！」

アストールが駆けているのは、町からほどなくしてある森の中だ。

外套男は彼を見るなり、即座に逃げだしていた。それがアストールの足を、余計に速めていた。

けして若くはないゴルバルナが、18の体躯のいい青年に追いつかれるのは時間の問題だった。暫くして、外套の男、ゴルバルナは走るのをやめて、彼の方へと向き直る。

「く、この筋肉馬鹿のオーガめ！」

ハアハアと息を切らせた初老のゴルバルナは、アストールを前に毒づく。

「へへ！ 体力だけは自信があるんでね！ さあ、変態爺！ 覚悟しやがれ」

アストールは鼻をすすると、腰の帯剣を抜いて構える。

例え相手が丸腰であっても、容赦をしない覚悟の表れとも取れる。

「く、こんな男に、私の夢が、計画が邪魔されるとは！」

ゴルバルナはそう言うと、殺気を込めてアストールを睨み付ける。そして、腰から杖を取り出して構えていた。

「観念しろ！ どうせすぐに騎士隊が来る。てめえは終わりだ」

「それはどうかのお？ さあ、行くぞ。炎の聖霊よ。我が言葉にしたが」

詠唱を始めたゴルバルナに、アストールは一気に間合いを詰めていく。

ゆづに大きな家一つ分くらいの距離を、あっという間に詰めていた。

「な、なんと!?!」

詠唱が終わるよりも先に、アストールの鋭い太刀筋がゴルバルナを襲う。

ゴルバルナはとっさに杖を横に構えて、彼の太刀筋を防ごうとした。だが……。

剣が杖を真っ二つに斬り、ゴルバルナはおじけずいてその場に尻もちをつく。

「へ、魔術師つてのは、杖がねえと何も出来ねえ人間なんだろ？」

杖を折られたゴルバルナは、不敵に笑みを浮かべるアストールを見上げ、悔しそうに睨み付けていた。

「貴様、それを知っていて、わざとあの距離を」

「ああ。あえて、てめえの杖を切らせてもらったんだ。さあ、次はてめえの番だ」

アストールはそう言うと、剣の切っ先をゴルバの首に突きつける。

形勢は完全にアストールのものとなり、ゴルバは一瞬で表情を変えていた。

「ひいい。ま、待ってくれ。助けてくれ」

おびえた表情を見せて、右手をアストールに向けるゴルバルナ。それを見て、アストールは表情をゆがませる。

「ああん？ てめえはそうやって助けを求める人を、黒魔術の実験で殺していったんだろ？ 助けてやるぎりなんてな、ねえんだよ！」

アストールはそう言うと、剣をゴルバルナの喉元に突き立てようとする。その時だった。

突然アストールの胸の前で爆発が起こり、焼けつくような炎が彼を襲っていた。

爆風で吹き飛ばされたアストールは、剣を抜いた位置まで吹き飛ばされる。

「ぐああー！」

地面に叩き付けられたアストールは、薄目を開けてゴルバルナを見る。ゴルバルナは右手をそのままにして、立ち上がり愉悦に浸った笑みを浮かべていた。

「どうじゃ？ 儂の一世一代の大演技は？ 見事じゃったろう？」

ゴルバルナは煙の上がる右腕を上げたまま、ゆっくりと歩み寄る。アストールが持っていた帯剣はどこかに吹き飛び、魔法をもろに受けた彼は胸を押さえて動けないでいた。

「な、なぜ。杖は破壊したはずだ……」

その言葉を聞いた瞬間に、ゴルバルナはどっと笑いだしていた。

「ははは。忘れたか、儂は黒魔術師よ。禁断魔法でこのくらいのことなど、容易いことよー！」

一気に形成の逆転した立場に、ゴルバルナはどっと笑いだす。

「ああ、愉快愉快。儂の計画を邪魔し、頓挫させてくれた貴様には最高のプレゼントじゃ」

魔法をもろに食らったアストールは意識を失いかけ、朦朧とする意識の中眩いていた。

「ああ、ちきしょう。最後に最高の女が抱きたかったぜ……」

そういふなり、彼の意識はぶつとりと途切れていた。

本当ならば、ここで彼の命などなくなっていたに等しい。だが、ゴルバルナは右手を下げ、気を失っている彼の前まで歩み寄る。

「ふむ。ただ、殺すだけではつまらん。どうせなら、もっと精神的に苦痛を与えてやってもいいだろう。わしが味わった以上の苦しみを味わうがいい」

ゴルバルナはそう言うと、またしても歪にゆがんだ笑みを浮かべていた。

ハームレイ大陸、かつては魔法を主流とした大帝国が栄えていた。だが、そんな帝国も皇帝の家柄の断絶によって、バラバラとなってしまう。

今やそのハームレイ大陸はいくつもの国々が乱立する戦乱の世を迎えていた。

そんな中、一際大きく安定した国がある。それがベルムンティア王国。

かの国ではかつて帝国が行っていた非人道的な魔術を禁止し、その魔術を研究する者に罰則を与えていた。

そして、その非人道的な魔術を研究する者を黒魔術師と呼んで、

蔑視することに成功する。世界においてもこの流れが確立し、早、700年。ベルムンティア王国は領土が最大となり、最盛期を迎えていた、

## 第一章 俺が女の子!? 1

「こつちにはいたか!？」

「いや、いない!」

耳に入ってくる男たちの声を聴き、アストールは目を覚ます。いまだに魔法を受けた胸が痛み、体も自由に動かない。

「どうするんだ?」

「どうもどうもあるか! あの黒魔術師を追い詰めたというのに」

男たちの会話を聞く限り、ゴルバルナはそう遠くには逃げている。い。

何より、自分はなぜか助かっている。

そのことに安堵しながら、アストールは目を開けていた。

「大丈夫?」

目を開けるとそこにはメアリーがいる。心なしか彼女がいつもより大きく見える。

「気が付いたわ!」

ぼやける視界にアストールは、周囲を見回していた。

森の道を巡回する銀色の甲冑に身を包んだ騎士とその従者たち。

騎士は馬に跨って指示をだし、従者は森の中を搜索する。

メアリーの声に即座に現れたのは、ジュナルだった。彼もまた心配そうに、アストールを見ていた。

「大丈夫かね？」

ジュナルがそう他人行儀に聞いてくる。

心なしか、ジュナルも自分よりも背丈が大きく感じられた。

(これが敗北するってことか……)

アストールはそう思うと、なぜか涙が零れ落ちてくる。

あそこまで追い詰めておきながら、自分の油断でまたしてもゴルバルナを逃がしてしまった。そう思うと、情けなくて仕方がなく、また、胸の奥に詰まっていた思いが吹き上がってきたのだ。

「だ、大丈夫？」

慌てたようにメアリーがアストールの目頭からこぼれた涙をふき取る。

「何か怖いことでもあったのであろう。もしかするとゴルバに乱暴されているのかもしれない」

(そう、乱暴されていた。ん？ 待て、確かに乱暴されたが、なんか言い方が違うよな)

「ジュナル！ そう言うことを本人の前で言わないの！」

メアリーがそう言うと、ジュナルは目を背けていた。



「お、おう。すまん。拙僧としたことが、気も使えずにすまぬ」

「でも、もしそうだったら、私、絶対許せない！」

メアリーが珍しく自分のために怒っていることに気付いて、アストールは妙にうれしくなる。ここはもう少し、彼女の膝の上で頭を寝かしておこう。

「にしても、あの筋肉馬鹿。どこ行ったのかしら？」

(ん？ 筋肉馬鹿？)

寝つこうとしたアストールは、すぐに目を覚ます。

「全くもって。あのお調子者が。いくら、綺麗な裸の女性を助けたからとて、自分の着ていたすべての衣類までも被せることもなかるうに」

ジュナルの言葉を聞いて、アストールは完全に目を覚ましていた。

(お、おれが裸？ ん？ 女性が裸？ じゃなくて、なんだ？ 何を言ってるんだ？)

「でも、裸でゴルバを追い回してるとなると、ちょっと笑えるかも」

メアリーがそう言うと、ぷつと吹き出す。

「全くもってその通りだ。まあ、それだけ余裕があるとみていい。安心してあのバカを待とうではないか」

ジュナルも自然と笑みを浮かべて、森の方へと顔を向ける。  
明らかに二人は勘違いしていた。なんせ、メアリーとジュナルの目の前に横たわっているのは……。

「な、何言ってるんだ？俺はちゃんとここにいるじゃねえか？」

瞬時にしてアストールは絶句する。そして、その言葉を聞いたメアリーとジュナルが、怪訝な表情を浮かべていた。

自分の出した声は明らかに女性の声、それもかなりの美声だ。

数瞬動きを止めたアストールは、その場で立ち上がっていた。  
立ち上がった瞬間に全ての服が、スルリと抜けおちる。自分の体を見た瞬間に、アストールは言葉を失っていた。アストールだけではない。

周囲の者が一斉に動きを止め、アストールを凝視する。  
もちろん、ジュナルもメアリーもである。

手を見れば細く、明らかに女性の綺麗な指が並び、その手を痛む胸に持っていくと、豊満な乳房がついている。

「あ。ある」

そして、そのままぎこちない手つきで、股間まで手を回してがっくしと肩を落としていた。

「な、ない……！」

その奇行に暫し全員が動きを止めていたが、メアリーが慌てて下

に落ちていた服を拾ってアストールの体にかけていた。

「ちよ、ちよっと。み、みないの！ 殿方は全員作業に戻りなさい！ さっさと戻れ！」

メアリーの怒るように言うと、全員がすぐに作業に戻っていた。立ち上がったメアリーと一緒に視点に、アストールは再び絶句する。

「ちよ、ちよっと、これはどういうことだ！？ なんで俺は女に！？」

「なに言ってるの！？ そんなことより、アストールはどこなの？」

奇行に気分を害したらしく、メアリーの口調はきつい。

「え？ 目の前にいるじゃねえか」

「はあ？ なになめたこと言ってるの？ あんたがアストールなわけないでしょ！」

混乱するアストールにメアリーが怒声を浴びせた。奇行に加えて見ず知らずの裸の女性がアストールと言い張るのだ。メアリーも気分が悪くなるのも無理はない。

「いやいや、メアリー聞いてくれ。俺はアストールだ。本当に俺なんだ」

「んなわけないでしょ！ あんたみたいな美女が、アストールなわけない！ 第一にあいつは男よ！」

「落ち着いて聞いてくれ。メアリー！ 何がなんだか俺にもわからないんだ。どうして自分が女になってるかなんて、俺が知りたいくらいなんだ！」

メアリーに対してアストールは至って真剣に話す。

最初は悪ふざけをしていると思ったのだが、とても彼女が嘘アストールを言っているとは思えなかった。

メアリーはそれに気付いて、怪訝な表情を見せながらも聞いていた。

「じゃあ、あんたがアストールだって言うなら、証拠をだしなさいよ」

そういわれて、アストールはしばし考えた後彼女に言っていた。

「エステイオ・アストール。王族付近衛騎士隊。第一軍団の軍団員。好んで使用する武器は大剣だ。レマニアル領の領主で、大抵、領内の奉公は爺さんにまかせきりだな。それによく口を酸っぱくして、将来のレマニアルの未来はどうなるうか心配だって言われてるぜ」

自信ありげにアストールは腰に手をやっていう。けして威張れるようなことでもないのだが、なぜか彼は自慢げにしていた。

どれもこれも知らうと思えば、知れる範囲の答えである。それに対して、メアリーは訝しげに目を向けていた。

「信じられないわ。第一に男が女になれるわけないもの」

「じゃあ、あれはどうだ？　俺がゴルバの秘密研究所を王城地下室で見つけたこと」

アストールの口から出た言葉に、メアリーは押し黙る。

王城の地下にゴルバの研究所があったことは、一部の関係者以外には口外されていない。ましてや、誰かが喋っていれば、それこそ処刑に値する。

だが、それでもメアリーは納得しかねていた。

目の前にいる金髪美女が、アストールの名を語ること自体怪しい出来事だ。もしかすると、魔術にかけられたゴルバの手先ではないかという懸念さえある。

「それに男が女になれるわけない！」

「……じゃあ、どうすれば信じてくれる？」

アストールがそう言うと、メアリーは暫し考え込む。そして、時間をあけて答えていた。

「私との出会いを話して」

それを聞いたアストールは、すぐにしゃべりだす。

「日が昇りきらない朝だったか。お前が狩りをして、妖魔8体に襲われてる所を、俺が助けた。確かその時、お前は弓の矢が切れていて、無謀にも素手で戦かおうとしてたな」

そう言われた時、メアリーはにわか信じがたいが、彼女がアストールであることを確信した。

なぜならば、その運命的な出会いは、誰にも口外していない。また、アストールにもこのことは言わないように口止めしていたのだ。

なおかつ、初めて会ったのは森の中で、けして街中で見られるようなことはない。

要は二人だけしか知りえない情報である。

「う、うそよ。うそ」

メアリーは半分確信していただけに、余計に目の前の現実を否定したくなる。

「こんなこと、こんなことあり得るわけじゃない！ 絶対にあいつがほかの女に喋ったんだ！ 女癖悪いしさ！」

「その言いようはヒドイな！ 確かに女癖悪いのは認めるが、俺は秘密を守る男だ。お前との秘密は何一つ他の奴にしゃべってねえ！」

女性の声だが、いつも聞いている口調で言われて、余計にメアリーは胸が張り裂けそうになる。

「う、うそよ。こんな、こんなの」

完全に否定しようがない事実には、メアリーは涙を流していた。

「ちょっと、待てよ。泣きたいのは俺の方なんだぜ？ なんで、お

前が泣くんだよ！」

「だ、だって、だって」

すぐにでも抱きしめてやりたい所だが、生憎、ほぼ全裸の状態だ。幸いメアリーが差し出した服で、体は隠れているが、禁欲主義の宗教騎士隊には生足に生腕はいささか攻撃的すぎる。ジュナルも目のやり場に困っている様子で、泣き出したメアリーに声をかけることができないでいる。

「だあ。もう！ くそお！ あのゴルバめ！ とりあえずあいつのせいだ！」

そうやけくそ気味に言うアストールは、泣き出したメアリーを宥めつつジュナルに目を向ける。

「ジュナル！ すぐに俺の着替えと馬を用意してくれ」

一連のやり取りを見ていたジュナルは、彼女がアストールであることに気付いていた。

「はは。とはいえ、まさかアストール殿が女になるとは……」

そう言ってジュナルはその場を立ち去っていた。

アストールの身がようやく落ち着いたのは、その日の夜の事だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8573z/>

---

私の騎士（かれ）は女の子！？

2011年12月27日00時53分発行